

リポーター

福祉風呂に感謝！ 健康をありがとう

リポーター 嵐内 敏夫としおさん
(中神明町)

お風呂好きは健康な人

いつも元気な大先輩に声をかけたら「たったの九十」と笑顔の返事。この湯は、私にあってよ。

昔の話だが、板子石境の大事業家の旦那様、お抱え人力車で、毎日湯つこに来たもんだと言う。銭湯には、昔も今も大勢のファンが居ったようだ。

昔は風呂屋とも銭湯とも言わず「湯」とだけ言ったらしい。昭和初期は「湯や」もたくさんあったが、今は三軒のみと寂しい。風呂好きのかたを増やして、裸で話し合える人が今の二倍ぐらい欲しい。

味のある「湯っこ」の屋号

鶴の湯とか亀の湯、寿の湯や梅の湯、名前を呼んでみて店主の気持ち分かるような気がする。

最近の一つの湯やにしか行っていないので独断をお許し頂きたい。私の行っている湯やの店主・島

おどさん、六十五過ぎだしべえ今日は「福祉風呂」の日だす。毎月の十日・二十日はただ（無料）。番台に居る主人に「湯札」を出したら返してくれた。
私は月の半分は銭湯に行くから、月々便利な湯札を求める。十回分の料分で十一枚もらえて一回分はただ。福祉分を加えると結構に安上がり、皆さんにも勧めたい。

あれから五年福祉風呂の恩恵に浴しながら、大きな浴槽にとっぷり浸る心地よさは、お金では得難い至福感でいっぱい。



店主の島山さんと嵐内リポーター（右）
(炊き場で)



いつまでも続いてほしい福祉風呂 みなさん大好きです

山さんは昔、南部から大館（餌釣）に来たかたのようで、新町の竹菊（竹村菊松）さんの大だんなさんのお引き立てで開業し、屋号に恩人の名前の一字を頂くと言う。ここで、奇しくも大館市を躍進させた二人の名前を聴く。

浴槽にお湯をいれる口に、瀬戸物の龍の顔をよく見かける。この湯やの注ぎ口は、ちよつと変わっていて、まか不思議な形状！神様のような大亀の首もとから、勢いよく注がれる湯音。銘石・竜

紋に興味を持って収集した中から店主が選び、自分で積み上げて造ったという逸品。昭和三十三年、大火後この湯やの再建のシンボルとなる。

この龍の口から流れ落ちる湯の音は、街の騒音や雑念を忘れさせてくれる。心身をいやしてくれる妙薬のように思えてならない。

お湯は古来から神聖なもの、風呂は、湯でみそぎをする意味もあったという。私の思い過ごしも知れないが、一度お試しを頂きたい。

教授推奨の健康法

足の下は第二の心臓の役目。風呂に入ったら、必ず疲れをとってあげなさい。秋田大学の津島教授のセミナーで教わったことがあります。

超音波によるジェット気泡浴が最高と言う。入浴で疲れをとり、肩や腰にもジェット気泡で効果的なマッサージも有効でしょう。

福祉風呂の日には時折、背中の流しあいを見る。戦時の苦難を思い出し、今の健康・幸せを感じて居られると思う。

福祉風呂の日があるように、年に一、二度は子供たち同士の体験入浴。どんなものだろうか？

終わり